

観峰書道

習字手本付録

Kampo School of
Calligraphy

発行日 2010年8月
発行者 原田由利
発行所 観峰文化センター
住所 〒606-8334
京都市左京区岡崎
南御所町 40-20

© 原田詳経 無断転載を禁ず

筆者

原田 観峰

1911~1995

・正しい文字美しい文字愛の習字の父
・正統書法を伝える書道教範の筆者
・美しい心と伝統の妙技伝承者



KAMPO

書塾出版

www.kampo.co.jp

「隸書体の特徴」

四書体のうち、もつとも速くできたのが隸書で、漢代後期に全盛したのが八分隸、つまり現代の隸書です。楷書にくらべると装飾的ですので、通常の実用文字として使われることはありませんが、題字やポスター等の文字としてよく使用されている書体です。

楷書との違いは、横画が平行であること、それに横画が縦画より太い場合が多いです。始筆は逆筆で収筆は払うことが多く、二字一波の原則があります。

字形は概ね、横広扁平で左右対称につくりまします。転折は筆を一度からげ直すので、楷書での二画が二画になるような感じですが。

一見したところ何でもないようですが、平行に運筆することは、長い間の楷書の右肩上がりのくせが出て、なかなか難しいものです。始筆も楷書になりがちですから、よくよく基本を練習しなければなりません。

「隸書の起り」

隸書は中国の戦国時代から秦の統一の頃にできた書体で、当時まで篆書が使われていましたが字画が煩雑で社会の実務に適しませんでした。当時王朝に仕えていた下級官吏や徒隸の間では急用に合わせるために書簡文(木簡)や伝達文など、自然に書体がくずれ、字画が簡略化されていたので、これを隸僕たちが使う字体という意味で隸書と呼ばれました。初めの頃の隸書を古隸といい、後の書体を八分と呼んでいます。

「用筆の特徴」

線にうねりが出て重厚になるのがこの書体の特徴。

隸書は藏鋒を用い、穂先を外に見せない方が落ちつきがあつてよい。

運筆にもこの配慮が大切なほういうまでもない。

使用する筆は穂先の鋭く長い筆は適しない。やや命毛のちびた筆がよい。

また穂先の短い喉太の中鋒か短鋒の方がよい。